

周辺の  
みどころ

近江一宮であった建部大社の周辺には奈良時代以来の遺跡や寺社が多くみられる。

●瀬田唐橋（大津市瀬田一丁目）

古代に架橋されて以来、東国から京都への入口を押さえる交通の要衝。高欄と擬宝珠を備えた中国風の橋として親しまれる。船渡御の発着地は橋畔にあたる。

●近江国庁跡（大津市大江六丁目ほか）史跡

律令国家の地方政庁であった近江国庁の遺跡。国司が政務を行った政庁の遺構が発掘調査で判明し、整然とした建物配置などが明らかとなった。史跡公園として整備され、古代の地方役所の様子をしのぶことができる。

●堂ノ上遺跡（大津市神領三丁目）史跡

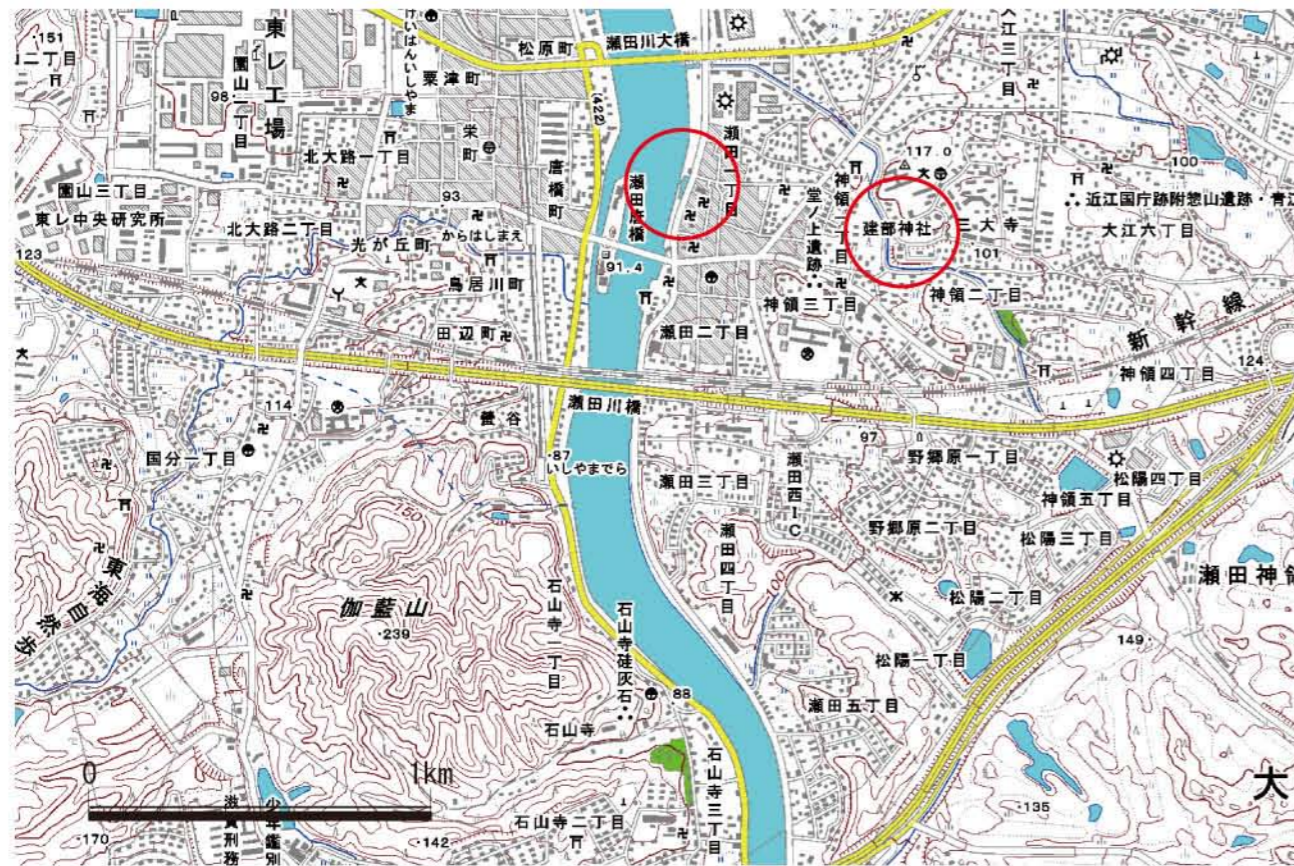
古代の交通制度における「勢多駅（せたのうまや）」跡と推定される遺跡。承和11年（844）銘の古瓦などが出土している。



重要文化財建部大社女神像

●石山寺（大津市寺辺）

良弁開基の名刹。西国三十三ヵ所観音霊場の一つであり、紫式部が源氏物語を著したという伝承も残されている。



【アクセス】

- JR琵琶湖線石山駅下車、バス「建部大社前」下車 3分
- JR琵琶湖線石山駅下車徒歩15分
- 名神高速道路瀬田西インターチェンジから5分

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】  
(関連文献/関連施設)

- 『神道大辞典』平凡社 昭和14年
- 『図説大津の歴史 上巻』大津市 平成11年

# 建部大社船幸祭

大津市神領一丁目



船幸祭渡御のようす（社団法人びわ湖大津観光協会提供）

建部大社船幸祭は毎年夏季に行われ、広く知られている。とくに8月17日の午後に行われる神輿の船渡御は、琵琶湖から流れ出る唯一の河川・瀬田川を舞台にしたユニークな祭礼として注目される。

建部大社を出発した神輿は橋本港で複数の船を組み合わせた御座船に載せられ、船団を伴って唐橋畔から瀬田川を下る。大津市黒津にある供御瀬遙拝所まで至った船団は、神事のあと再び瀬田川をさかのぼり、かがり火や花火などに照らされた宵闇の唐橋畔に帰着するのである。これは、祭神である日本武尊の東征神話の中に、尊が相模灘を船で渡った物語があり、その故事にちなむものといわれている。

神輿が船で渡御するという祭礼形式の背後に、琵琶湖や瀬田川の水を尊び水の恵みに感謝する、古来からの素朴な信仰のあり方があらわれており、水と人との関係性が象徴されている。







建部大社  
拝殿方面から透塀越しに本殿（左）、権殿（右）をのぞむ

## 建部大社船幸祭

所在地 大津市神領一丁目（建部大社）

### 近江一宮 建部大社

建部大社は景行天皇46年に草創され、白鳳4年瀬田大野山に、天平勝宝7年（755）さらに現在地に遷祀されたものと伝わる。文献に現れるのは平安時代初期のことで、貞観2年（860）官社に列し、応和2年（962）神位が正三位に進められた。「延喜式」神名帳に名神大社として記載され、のちに近江国一宮として信仰されるに至る。近江国府推定地に近接して所在することから、一宮として特に歴代国司の信仰を受けたことが推測される。

なお、当社は日本武尊を祭神とすることから、朝廷からの信仰以外にも、武門の崇敬が篤かったことが伝えられる。『平治物語』に、源頼朝が伊豆に配流される路次に参籠して、みずからの前途を祈願したことが記されている。だが、源平争乱や承久の乱などで度々兵火に侵され、

神領も多くは押領を受けて衰微の一途をたどった。江戸時代には膳所藩主本多氏から20石の社領が寄進されたものの、平安期の繁栄に復することは到底困難であった。

神宝として重要文化財の木造女神坐像1軀（附小女神坐像2軀）が伝えられる。像高は現状で41cm、ヒノキ材の一木造で内刳りを施す。豊かな頬の女神像で、垂髪とし、右袖で口もとを覆う特異なしぐさをとっている。平安時代後期における貴族女性の姿をしのばせ、高雅な印象の神像である。

境内には鎌倉時代文永7年（1270）の銘がある石燈籠も伝えられ、重要文化財に指定されている。花崗岩製で、火袋は六角形、竿は円筒形とする。武骨でおおらかな印象の作例である。



大社を出発する神輿と駕輿丁  
（社団法人びわ湖大津観光協会提供）

### 建部大社船幸祭

建部大社例大祭は毎年4月15日に行われる神輿の渡御などがあるが、8月17日に行われる船幸祭が「大津三大祭」に数えられて著名となっている。同社では夏季の「納涼祭」として榊立神事、宵宮祭、神楽船幸祭と続く一連の特殊神事があり、その掉尾を飾るのが船幸祭である。

祭は8月17日の午後に行われる神輿の船渡御で注目される。神輿は複数の船を組み合わせた御座船に載せられ、他に神官や楽人稚児、神事座（弓座・神楽座・大野座など）関係者らが乗る船、警護船などと船団を組み、唐橋畔から瀬田川を下る。大津市黒津の供御瀬遙拝所まで至った船団は、ここで御供を献じたあと還御する。供御瀬は本来もっと下流に存在したが、南郷洗堰の建設により船の航行が不可能となったため、遙拝所が設けられたものである。

室町時代、永正7年（1510）の社蔵記録に「七月七日 御涼之神事素麺之を献ず、神輿若



神輿を御座船に載せる



船団を組み船渡御を開始する



遥拝所における舞の奉納  
（社団法人びわ湖大津観光協会提供）

宮え渡御、帰座黒津御供之を献ず、今俗云供御之瀬此所也」などに見えることから、中世以来の歴史をもつ祭礼であることがわかるとともに、古くは「御涼の神事」と呼ばれる七夕の祭礼であったようだ。記録から推測すると、神輿はもともと瀬田川のかなり下流にあった「若宮」まで渡御していたようで、帰途に聖地である供御瀬で神饌が献上されたのである。現在の祭礼の原型が、そこに見出される。